

# 英語教師の「三つの仕事」「三つの危険」(上)

"Three Tasks" and "Three Dangers" of English Teachers (1)

寺島隆吉

TERASIMA, Takayosi

## 目次

- 1 はじめに
  - 2 教師の三つの仕事
  - 3 「学校生活」=英語なのか
  - 4 誰に焦点を合わせて授業をするのか
  - 5 「学びの共同体」をつくる
  - 6 岐阜県にとって外国人とは誰か
  - 7 「外国語=英語」なのか
  - 8 英語は本当に必要なのか
  - 9 「情報収集の手段」としての英語
  - 10 米国のどこを訪ねるのか
  - 11 「十年の法則」とは何か
  - 12 何よりも「転移する学力」を
  - 13 「見える学力」の基礎とは？
  - 14 通じる英語の「水源地」とは？
- NOTES
- REFERENCES
- APPENDIX

## 1 はじめに

以下は愛媛大学英語教育改革セミナー（2005年3月）に招かれて講演したものに加筆したものです。前半は「英語教師の、三つの仕事」、後半は「英語教師の、三つの危険」と題して話をしました。今回の報告はその前半に当たるものです。この記録が英語教育の前進に少しでも貢献できれば幸いです。

## 2 教師の三つの仕事

最近『『英語が使える日本人』育成のための行動計画』というのを文科省が出したり、それ以前に英語を公用語にするかどうかという論争がありました（船橋 2000, 大津&鳥飼 2002）が、私は英語教師には三つの仕事があると思っています。

普通、生徒に「英語を勉強しろ」と言うのが英語教師のように思われがちですが、英語教師の先ず第一の仕事は「英語だけが外国語ではないんだよ」と教えることではないかと私は思っています。

では英語教師の第二の仕事は何でしょうか。それは、十年なら十年、英語を学び続ける夢を育てるという仕事です。本当に英語を勉強したら役に立つんだということを英語教師としての行動や体験で示しながら、最低十年、学び続ける夢と力を育てることです。それが二つ目です。

最後の第三の仕事は、幹と枝葉を区別して「英語はこうすればものになる」という道筋をきちっと教えてやる仕事です。言い換えると、「転移する学力」を付けてやるのが英語教師の仕事だと思うのです。

ガンとか病気は転移したら困るんですが、英語の場合、あるいは英語に限らず全て教科において、教師は「転移する学力」を付けてやらなくてはならないというのが私の考えです。

例えば、自分の家の自転車には乗れるけれど他人（ひと）の家の自転車には乗れなかったら意味がないでしょう。このプールでは泳げるようになったけれど、あっちのプールでは泳げないというような学力では意味がないですね。こっちで身に付いた学力はあっちでも生きないと、つまり転移しないと意味がないわけです。

このように教師には三つの仕事があると思うんですが、以下それをもう少し詳しく説明したいと思っています。それで先ず一番目の仕事、すなわち「英語だけが外国語でないことを教えるということか」です。

## 3 英語が全てではない

しかし、その前に確認しておきたいことがあります。というのは、教師なら誰でもそうなんですが、自分が英語教師であれば、全ての生徒が英語に命をかけてもらわないと困ると思いがちなんです。だとすると理科の先生もそう思ってるわけですし、国語の先生もそう思ってることになります。

これは生徒にしてみたら大変なことです。なぜなら全ての教科の先生から「俺の教科に命をかけろ」と言われたら、生徒は体がいくつあっても足りないことになります。ですから、英語教師の仕事は「英語に命をかけたい」と思う生徒を何人育てられるかを他教科の教師と勝負することだと思うのです。

逆に言えば、数学がすごく好きだ（あるいは理科がすごく好きだ）という生徒はそれに命をかければいいので、そのような生徒には「英語はほどほどでいいんだよ。単位さえ取ればいいと言うんだったらその程度で頑張りなさい。だけど単位を取るためにはここまでしないとダメなんだよ」ということをきちっと指示してやるのがまず教師の仕事だと思うのです。

そのためには「こういう課題を与えてここまでやらないと落第にします」という基準を教師は示す必要があります。最近、情報公開というのが流行りですが、そういう情報公開をきちっとすること、それが教師の第一の仕事だと思うのです。例えば35点が赤点の基準だとしたら、どのような課題、どのような目標を達成したら35点になるのかを明示できる力量を教師は身につけなければなら

いと思うのです。

授業開きで「ここまでやらないと単位は取れないよ」というふうに、生徒に取り組むべき課題と評価の基準(評価の仕組み)を明示することが、教師の仕事の出発点です。しかし実は、「最低ここまでやりなさい」「ここまでできないと赤点なです」という最低ラインを決める仕事は非常に難しい仕事です。なぜなら、それは教師の力量と目の前にいる生徒の力量の相関関係で決まるからです。

力量のある教師が生徒を指導するのであれば、少し高いレベルに最低ラインを設定しても、比較的簡単にそれをクリアさせることができます。生徒のレベルが高ければ、さらに高い基準を最低ライン(赤点)に設定できるでしょう。しかし教師の力量が極めて低いのに高い最低ラインを設定したら半分の生徒もクリアできない可能性があります。だから赤点ラインの設定は極めて難しい問題なのです。

私が定時制高校で教えていたとき、教科書では生徒の歯が立たない(教科書では生徒の興味を引き出せない)ので手作りの教材をよく使いました。その新しい教材で1年生を教えてみて、ほぼ全員ができることが確認できれば、次の新しく入ってくる1年生にはワンランクだけレベルアップした教材を工夫しなければなりません。

私の場合、新しい手作り教材は2年生にも3年生にもやらせてみるのですが、その教材を2年生はできるけれど1年生ができないと分かったら、1年生用の教材は全く作り直しです。逆に2年生用の教材でも1年生ができることが分かれば、2年生用の教材を更にグレード・アップしなければなりません。「こんな高いレベルの教材でもできるのだったら」ということで最低ラインの基準が上がっていくわけです。

#### 4 誰に焦点を合わせて授業をするか

教師に「授業をするとき誰に焦点を合わせて授業をしますか」という質問をすると、ほとんどの教師は「中間の生徒に合わせて授業」をされると言います。しかし、そのような授業は絶対に上手くいきません。なぜなら、そのような授業は上の生徒には退屈ですし、下の生徒には理解できませんから、結局、授業が成立しないことになるからです。これは当然のことです。

では、どこに合わせて授業をすれば良いのでしょうか。私の場合、常に最低レベルの生徒に合わせて授業をしてきました。私は、自分の主催している英語教育の研究会で、いつも「両端をつかみなさい」と言っています。風呂敷の両端をつかんで引っ張り上げれば、なかみの全体が引っ張りあがってきます。それと同じように生徒も両端をつかむのです。

ビリの生徒とトップの生徒の両端をつかんで引き上げることができれば、全体も上がってくるのです。つまり、一番ビリの生徒が「これなら分かる」「これは面白い!」というふうに授業に乗り出してくるような教材を使い、しかもトップの生徒も退屈しない「授業の方法」「授業の仕組み」が必要なのです。

たとえば授業ではビリの生徒に焦点を当てながら、トップの生徒には次のもっと高度な課題を与えるのです。「家に持って帰って勉強したくなるような教材」「家に持って帰って自力でどんどやっても面白い教材」を与えることが重要です。あるいは最初から与える教材をグレード分けして順番に並べておくのも良いかも知れません。

私の場合、定時制高校では、「この課題の次はこの課題」「その課題を終えれば次はこの課題」とかいうように、グレード別になっている課題を用意し、それが合格したら順繰りに次の課題をやらせてきました。トップの生徒はそれをどんどんやりながら、「先生、これ終わったら、次は何をやらせてくれるんや」と言いに来るような教材と授業システムを作っておかないといけないのです。教師は常にそういう教材を用意しておかなければならないのです。

### 5 「学びの共同体」をつくる

私は記号研という英語教育の研究会を作っていて、全国に百人弱の会員がいます。そして毎月24ページ建ての機関紙を発行してきました。私が定時制高校にいたときに開発した教材と教授法で実践しているのですが、その中のひとつにリーディングマラソンというメソッドがあります。そして読み出したらやめられない止まらないという教材を「記号づけ穴埋めプリント」という特別なプリントに編集し直して読んでいくわけです<註1>。

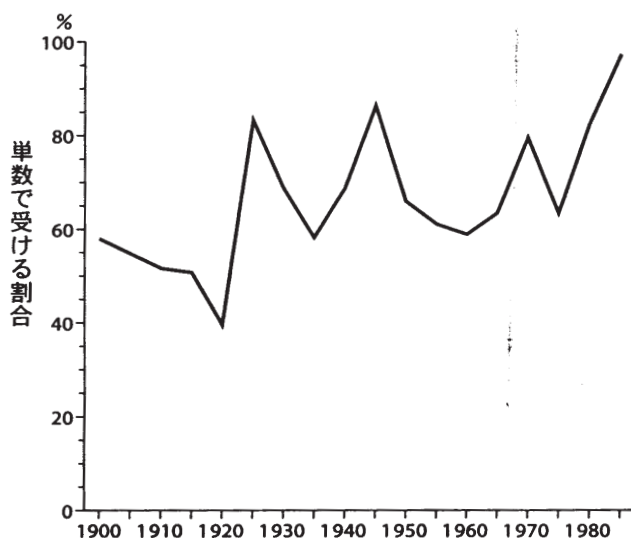
この教室の書籍販売コーナーに『魔法の英語』（あすなろ社／三友社出版）という教材を置いてあります。それを見ていただくと「記号づけプリント」とはどういうものかご理解いただけだと思いますが、そのような独特なプリントを作って、その空欄に英訳を埋めながら英文を読ませていくのです。そして次々と1枚ずつ読み進んでいくので「リーディングマラソン」と読んでいました。

例えば、『風の谷のナウシカ』の英語版が三友社出版から出ているのですが、それを「記号づけプリント」にすると、全部で百枚くらいになります。その百枚のプリントを、生徒は読み出したら止まらなくて、「次をくれ」「次のプリントをくれ」と先生は印刷に追われるのです。それを読み終わっても別に点数として加算されないのに（評価の対象にならないのに）生徒はどんどん走るのです。

先述の通り、これを私の研究会ではマラソン方式（リーディング・マラソン）と呼んでいるのですが、生徒に「読み終わったら次をあげるから取りに来なさい」と言うと、どんどん取りに来て、「先生、まだ印刷できとらんのか」と文句が出るくらいに要求が出てくるのです。印刷するのに先生が疲れてしまうくらいに追い込まれるのです。百枚を一度に渡さないというのがコツなのです。一度に渡さなくて順繰りに渡していくから、かえって次が欲しくなるのです。

一度に百枚も渡されると圧倒されて読む意欲が消えてしまいます。こんなに読まなきゃならんのかと思うのです。それを逆にもっと読みたいと思わせる工夫が必要です。それを読みたいと思うように追い込んでいくのが教師の仕事だと思うんです。しかも、トップの生徒には、単に自分が先頭を走ればよいというのではなくて、「常に後ろを見ながら走る」という人間的な力量もつけてやるのが重要です。

出来ない生徒が本当に「ここが分らん」と言い出したら、だいたい出来る生徒も上手く説明できないのです。例えば、the team という集合名詞は、is で受けるのが正しいのでしょうか、それともareで受けるのでしょうか。teamは複数の人間で出来あがっているわけですから、これを主語とする述語動詞はisなのかareなのか、出来る生徒だって上手く説明できないのではないのでしょうか。



図表1 「タイムズ」紙社説上における、集合名詞の主語に単数の動詞を使用する場合

デイヴィッド・グラッドルの『英語の未来』(山岸勝栄・訳, 研究社出版, 1999)という本を読んでいたなら、イギリス人でも、isとareの選択に迷いが生じています。つまり、isで受ける方が多いときとareで受けるときが多いときと、上図のように始終、変動しているのです。ネイティブ・スピーカーでも迷ってるんですよ。

だから出来ない生徒から「分からない、説明してくれ」と言われたら出来る生徒だって分からないことの方が多いのです。そして質問されて初めて、自分が単に丸暗記していただけであって、きちんと考えた上で理解しているのではないということが分かってくるわけです。そんなふうにして出来る生徒と出来ない生徒が相互に学習し合う環境をどうやって作っていくことが教師の仕事だと思うのです。

## 6 岐阜県にとって外国人とは誰か

少し話が逸れましたけれども、そんなふうにして教師はいくつかの仕事を持ってるんですが、元の話に戻しますと、生徒の全てが英語に命を掛けなくてもいいのです。そうではなくて、教師が「自分の教える教科に命をかけて頑張る生徒をどれだけ多く育てることができるか」を競い合えばよいのです。

ですから、英語教師としてやらなければならないことは、「英語に命をかけなくていいんだ」と言いながら、理科の先生よりも自分に命を掛けてくれる生徒をどうやって多く増やすかでしょう。それが教師の仕事であって、自分の教科の勉強を義務として強制することではないはずです。

それにもかかわらず、ほとんどの人は、教師になった途端に「お前ら、なぜ予習してこなかったんだ」と真っ赤になって怒ったり、罰として職員室に立たせたりといったことを生徒にさせるわけです。罰を与えながら勉強に追い込むことが教師の仕事ではなく、「面白いから俺は英語に命を掛けてみたい」と思う生徒を何人作るか、それが教師の仕事ではないでしょうか。

これは他の教科についても同じなんですが、外国語の学習というという観点から見ても同じことが言えます。つまり全ての生徒が英語を学ばなければならないのでしょうか。だって、世の中に言語はいっぱいあるわけですから、何かひとつは外国語を学ばなければならないとしても、それはフランス語であってもいいわけだし、ドイツ語であってもいいわけです。

だいたい、隣に韓国があるのになぜ韓国朝鮮語を勉強しないのかと考えると、英語だけというのは、とても不自然です。その関連で言います、いま岐阜県には、愛知県豊田市とか群馬県太田市に匹敵するくらいブラジル人が多いのです。岐阜県大垣市、可児市、各務原市、美濃加茂市などには、トヨタの下請けとかソニーの下請けとかの工場があり、日系ブラジル人の出稼ぎの人たちが激増しているのです。

この前も私は美濃加茂市に呼ばれて行って非常に驚きました。2,800人のソニー部品組立工場があるんですが、その2,800人のうちの2000人がブラジル人の労働者でした。その激増ぶりに本当に驚きました。しかもそのほぼ全員が派遣労働者または請負労働者であって正規雇用ではないのです。

それはともかく、今こんなふうにブラジル人労働者が激増している状況で小学校はどうなっているかという、可児市とか美濃加茂市なんかでは、小学校のークラスに必ずブラジル人の生徒が数人はいるのです。その生徒たちは日本語が分からないから授業についていけなくて困っているのです。

ところで、ブラジルの公式言語は何語かご存じですか。だいたい日本は英語一辺倒だから、ブラジルは何語を話しているかを岐阜大学でも知らない学生が多いのです。英語を学ぶこと・英語が話せることが国際化だと錯覚しているのです。「内なる国際化」の実情がよく分かっていないのです。

正直なところ、岐阜がこういうふう国際化していること、すなわち「内なる国際化」をしている現状に、私自身も最近まで気づきませんでした。恥ずかしながら全く知らなかったんです。文科省を先頭に連日「英語、英語、英語」と叫ばれているので、いつも目はアメリカの方しか向いていなかっ



たのです。

日本人の目がアメリカ以外に向いているとしても、せいぜいフランスかドイツぐらいしか向いていないのではないのでしょうか。これはちょっと自分の住んでいる所の悪口になるかも知れませんが、例えば岐阜市なんか英語特区ということで小学校から英語をやり始めています。そして「英語で発信しよう」とか言って、英語のホームページを作るといった実践もおこなわれています。

区分	総数	韓国・朝鮮	中国	ブラジル	フィリピン	ペルー	米国	その他
県計	44,678	6,832	11,258	16,449	5,643	938	360	3,198
市計	35,852	5,530	7,729	14,317	4,725	767	283	2,471
岐阜市	8,364	1,855	3,381	232	1,715	55	111	985
大垣市	5,387	533	957	3,219	298	149	41	190
高山市	543	237	96	38	83	2	14	73
多治見市	1,094	716	133	82	70	3	18	72
関市	1,620	92	482	828	119	4	23	72
中津川市	749	63	205	284	69	19	11	98
美濃市	226	8	117	50	15	-	-	36
瑞浪市	751	117	116	226	133	50	4	105
羽島市	901	146	493	40	110	33	2	77
恵那市	448	101	41	161	84	27	4	30
美濃加茂市	4,140	154	232	2,932	659	92	5	66
土岐市	1,549	409	108	393	311	167	11	150
各務原市	3,056	499	325	1,666	196	128	12	230
可児市	5,058	317	92	3,874	602	31	16	126
山県市	387	25	265	29	20	-	6	42
瑞穂市	1,579	258	686	263	241	7	5	119

図表2 「県内市別外国人登録者数（主要国籍別）」

<平成14（2002）年12月31日現在 単位：人>

しかし誰に向かって発信しているのでしょうか。なぜなら岐阜に住んでいる人たち（「岐阜県における外国人登録の状況」<http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11129/kokusai/kokusaitop.htm>）の多くは韓国朝鮮人、中国人、ブラジル人、ペルー人、フィリピン人などです。フィリピンは英語が公用語になっているから、まだよいとしても、人口比からすればアメリカ人なんて極めて少数です。

だとすると、このホームページは誰に向かって発信されているのでしょうか。英語のHPを読んでほしいというのですが、その相手というのは誰なのでしょう。本当に岐阜に住んでいる外国人に読んでほしいのであれば、別の外国語が必要なのではないのでしょうか。たとえば大垣市にいる外国人であれば最も多いのはブラジル人ですし、その次に多いのが中国人で、3番目が在日韓国朝鮮人です。

学校教育を国際化する、ホームページをいろんな人に読んでほしいと言うんだったら、あるいは自分たちのやっている教育を外に向かって発信したいというんだったら、そこに住んでいる外国人に読んでもらわないと意味がないわけでしょう。ところが日本人には外国人といったら英語をしゃべるといふ思いこみがあるのです。そういう「国際化」というのは、全く意味のない国際化ではないのでしょうか。

例えば、岐阜市では中国人が圧倒的に増えています。だけど、ここで2番目に多いのは在日韓国朝鮮人です。しかし、この人たちには母語で教育を受ける権利が保障されていません。最近、「国際『言語権』宣言」というものが出されましたが、それには「全ての子供に、母語で教育を受ける権利

がある」と書かれています。これが「言語権宣言」の精神です(資料1および註2を参照)。

したがって在日韓国朝鮮人には自分の母語である韓国朝鮮語を学ぶ権利がありますし、その母語で教育を受ける権利があるわけです。ブラジルから来た子供もポルトガル語で教育を受ける権利があるわけです。ところが日本では、ポルトガル語の教育も保障されていませんし、日本語教育をきちんと受ける機会も十分に保障されていません。国語の時間はありますが、「外国語としての日本語」を教える専門の教師は皆無に近いのです。

だから可児市でも美濃加茂市でも、あるいは大垣市でも、そのこの小学校に入ってきているブラジル人の生徒は授業を受けていても全く内容が理解できないことになります。もちろんポルトガルで説明してくれる教師もいません。だから1クラスに必ず複数はいるブラジル人児童は授業についていけないことになります。さらに言えば、それが学級崩壊の原因になる恐れもあります。

そういう現状をきちっと踏まえると、英語一辺倒というのはいかに不自然かということがよく分かります。だから、いま可児市とか大垣市とか美濃加茂市とかの小学校の先生になるときに必要なのは、ポルトガル語なんです。ポルトガル語の素養が少しでもある教師でないと学級経営が非常に難しいのです。逆に言えば、ポルトガル語を少しでも知っているのと学級経営は大いに助かるのです。

話は少し飛ぶのですが、岐阜大学に国際交流提携校というのがあります。学生から「先生、留学したいんだけど、どこへ行けばいいですか」「アメリカがよいでしょうか、それともアメリカは危険だからオーストラリアでしょうか」とかの相談で、しばしば学生が私のところにきます。そのとき私は半ば冗談半分に「ブラジルへ行きなさい。そのほうが教員になる近道だから」と言うのです。

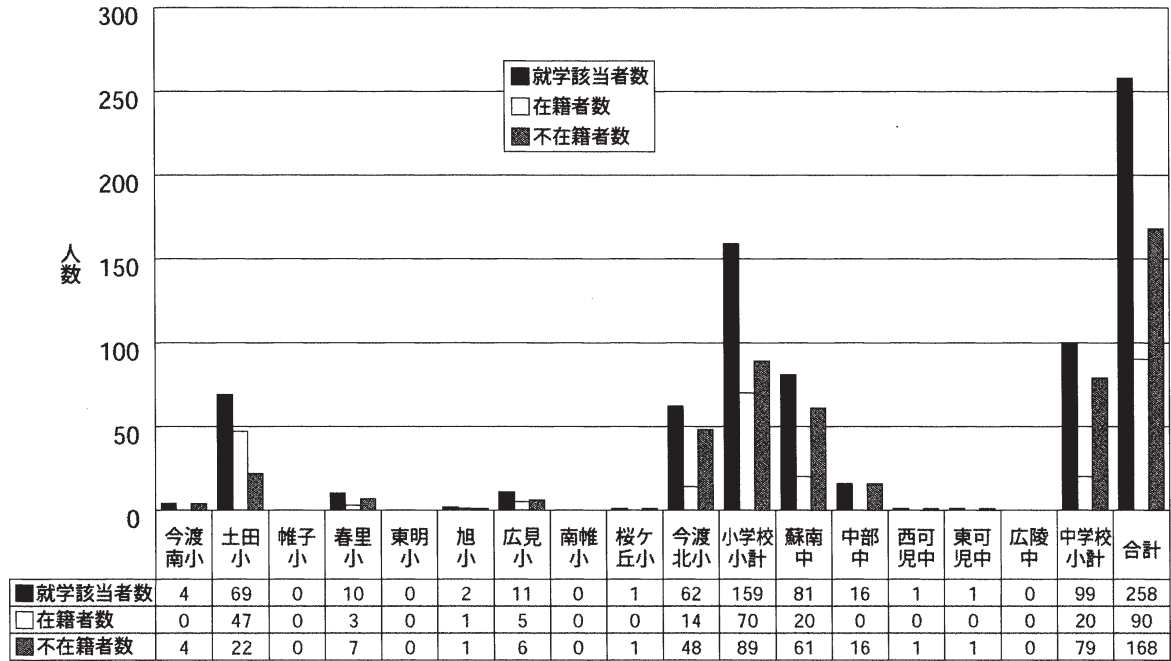
というのは、近くに私立大学があるのですが、小学校教員課程の卒業生の教員採用率が高いという記事が新聞に載っていたのです。その記事をよく読んでみると、その大学ではポルトガル語を特別に教えていて、それが理由で採用率が高いのではないかと推測されていたのです。だとすれば、ブラジルのカンピーナスというところに岐阜大学の交流提携校があるのですから、そこに行かない手はありません。

そういうわけで「カンピーナスに行って、1年後にポルトガル語がある程度できるようになって戻ってくれば、必ず教員に採用されますよ。教育委員会も困ってるんだから」「だから教師になりたくて確実に採用されたいと思うんだったら、英語を勉強するよりもポルトガル語を勉強しなさい」という先の助言になったのでした。事実、私の研究室に出入りしていた学生でカンピーナスから戻ってきて愛知県犬山市の国際交流室に就職した学生がいました。

## 7 英語が外国語の全てではない

したがって、元の話に戻りますと、英語の教師は「外国語は英語だけではないんだ」ということをどうやって教えるかも重要な仕事の一つだと思うのです。そのようなことを認識しながら広い視野の中で英語を教えるということが英語教師の仕事でなくてはいけないはずだと考えるのです。英語だけを見ていると、すなわち英語一辺倒になっていると、いま教育界全体がどういうふうになっているのか、子供たちがいまだんなことで困っているのかということが見えなくなってしまうからです。

その例として、先の話の延長になりますが、下図を見ていただきたいと思います。これは2002年4月1日現在の可児市の例です。土田小学校ではブラジル人生徒の不就学率がかなり高いということが分かります。さらに、これが中学校になると、この蘇南中学校はブラジル人生徒の不就学率が圧倒的に高いことが分かります。それどころか隣の中部中学校になると、ブラジル人生徒で学校に行っている生徒数はゼロです。これくらい可児市の教育状況は深刻なのです<註3>。



図表3 可児市外国人児童の就学状況 (2002年4月1日現在)

こういう現状を生み出しているのは、日本語の教育すなわち「外国語としての日本語教育」も母語のポルトガル語教育も十分に保障されていないことにあります。これらが保障されていないから「授業についていけない」「中学へ行っても意味がない」ということになって、学校へ行かなくなるのです。

これをこのままずっと放置していくと、そういう中学生たちが今度は社会不安の原因になっていく恐れがあります。例えば、愛知のトヨタ工場の団地として保見町という町があり、そこはブラジル人の集団居住地区として非常に有名なんです。様々のトラブルが起きています。警察沙汰になって新聞に出たこともあります。

そういう状況が可児市、美濃加茂市、あるいは大垣市で起きるかも知れないという状況がどんどん溜まっていったるわけです。これが今の日本の国際化している現状なのです。そういうことを踏まえた上で私たちは英語教育について考えなければいけないのです。英語一辺倒ではなくて広い視野の中で外国語を位置づける必要がありますし、英語教師はそういう認識を持つ必要があると私は思っています。

### 8 英語は本当に必要なのか

教師の仕事の一番目は、「英語だけが外国語でない」ということを教えることでしたが、第二の仕事は冒頭にも述べたように、「英語を学び続ける夢を育てること」「それを行動として教師自身が示すこと」だと思います。

英語教師は「英語は国際語だから勉強しなさい」「役に立つから勉強しなさい」としばしば言うのですが、英語教師自身が本当に英語を役立てているか、英語を本当に使っているかという、正直言って極めて怪しいと思うのです。

英語教師だから英語を教えるために毎日教壇に立っていることは事実ですが、本当に生活の中で役に立つ道具として英語を使っているかと言うとほとんど使っていないと思います。少なくとも私は、英語を常時使っているかという、ほとんど使っていません。使っているとしたら、二つぐらいでしょう。



ひとつは大学院の授業です。留学生が多くて、しかも最初は日本語が不自由だから、結局、英語を使って討論することになります。私のところにはイラクやベトナムから院生・研究生が来ていましたし、今は内モンゴルも含めて中国からの留学生もいます。それで最初は日本語が不自由だから、しかたなく授業は英語でやらざるを得ないわけです。

そんなわけで教材だけでなく討論も英語でやりますが、それはやらざるを得ないからやってるのです。しかし、この大学院の授業と、後で述べる「英語による情報収集」以外に、どうしても必要に迫られて英語を日常的に使う機会が、私にはあまりありません。それが日本の現実です。

文科省は「日本人は英語が出来ない。だから英語を使える日本人を育成する」と行動計画で言っているのですが、高名な言語学者である鈴木孝夫さんはどう言ってるかと、「日本人の英語が伸びないのは当たり前だ。日常的に必要なないからだ」と著書『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波新書, 1999) で述べているのです。

私はベトナムに興味があって、ベトナムにしばしば行きましたが、ハノイや昔のサイゴン、今のホーチミン市へ行くと、子どもたちが群がり寄ってきて、日本人と見れば日本語で話しかけてきます。英語で切り返すと英語で話しかけてくるのです。例えば、絵葉書を売りに来て、“Buy this picture, please.” とか言うんです。

彼らはストリートチルドレンですから、日本語教育を受けているわけでもありませんし、英語教育を受けたわけでもありません。しかし実に上手い日本語を使うし、実に上手い英語を使います。全く教育を受けていないのに、これだけ日本語や英語が使えるというのは、生活で必要とされているからなんです。

逆に言えば、鈴木孝夫さんが言うように、私たちの英語が伸びないのはそれが必要とされていないからです。だからTOEICとかTOEFLの試験で日本人がすごく悪いと言われますが、それは当然なのです。他方、フィリピンのような国の点数が高いのは英語国の旧植民地で英語が公用語だったりするから、それもある意味で当然なわけです。

日本と似たような環境にある国として韓国があげられ、韓国とは大きく水を開けられてると言われますが、韓国の今の状況というのは私見によれば日本の1960年代、70年代に似ています。受験熱が過熱していて、親も子どもを良い大学へ入れるためにしのぎを削っているのです。

中国の学生も似たようなことを言っていました、「朝補習」がありますので、教師も朝は7時には学校に行きます。夜は夜で「夜補習」があって教師も家に帰るのは九時または十時が当たり前という状況です。それどころか韓国は中国と違って学習塾がありますから、子供たちの帰宅は深夜というのが珍しくありません。そういう特殊な状況が韓国にはあるのです。

余談ですが、学生運動についても労働争議についても日本の60-70年代に今の韓国はとてもよく似ている気がします。当時の日本は騒然としていましたが、いま韓国はそういう状況です。しかし、現在の日本には学生運動は無いに等しいですし、労働組合も存在しているのかどうかすら分からない状況です。存在していても御用組合に変質してしまっていますからリストラが頻発していても労働者を守ってくれる存在ではなくなってきています(齊藤貴男『機会不平等』文春文庫, 2004)。

それはともかく、韓国の受験熱・英語熱は極めて過激です。たとえば英語らしい発音にするためと称して、親が子どもの舌を手術しアメリカ人の舌の形に直すこともおこなわれていて、映画になるほど非常に大きな話題になりました(映画タイトル『神秘的な英語の国』、オムニバス映画『もし、あなたなら〜6つの視線』の中の一つ)。それほど異常な英語熱なのです。

あるいは、英語教育のためにお母さんが子どもを連れてアメリカに行ってしまうと、残ったお父さんが必死になってお金を稼ぎ、アメリカに送金する例も少なくありません。これを韓国語で「キログ・アパ」(雁パパ)と言うそうですが、「最近、家族から離れて暮らすことを苦にするキログ・アパが増えている。その辛い生活がもとで離婚に至るケースも話題になっている。1日も早く英語という呪縛

から抜け出したいものだ」というコラム記事さえ目にするようになっていきます (資料参照)。

そういう特殊な状況の中で韓国のTOEICの点数の高さがあると思うんですが、一般的に言うと、点数が高いところは英語圏の旧植民地で、しかも公用語または半公用語になっているところなんです。ですから英語の点数が高いということは国としてあまり幸せな環境にはない所だとも言えるわけです。そういう意味では、私たち日本人の点数が低いということは幸せなのです。英語をあまり必要としない環境にいるのですから。

したがって本当に英語が必要だというのであれば、それを行動や自分の体験で示してやる必要があるのではないのでしょうか。教師が「俺はこんなふうに英語を使ってる」と体で示してやる必要があると思うんです。例えば私の場合、自分が世界のあちこちを歩きながらどういうふうに英語を使ってきたかという体験談を『国際理解の歩き方』(あすなろ社/三友社出版)で書いていますが、そういうことを教室で語ってやるのが大切なのではないのでしょうか。

それはともかく、教師が生徒に「英語は必要だ」と言うのであれば、「俺はこんなふうにして今でも英語を使っている、そして役立っている」という体験が教師になければいけないのではないのでしょうか。そうでなければ単なる抽象的なお説教になってしまいます。それでは話に説得力が生まれませんし、生徒もあまり納得しないでしょう。そもそも自分が日頃から英語を使っていなければ「英語は必要だ、役立つ」というのは嘘だということになるからです。

## 9 英語を情報収集の手段として使っているか

先に私は「自分が日常的に英語を使っているのは二つぐらいしかない」と言いましたが、留学生の多い院生の授業がその一つでした。では、英語のもう一つの使い方は何でしょうか。私の場合、それはチョムスキーの意見を英語で調べるという作業です。何か事件があると、それについてのチョムスキーの意見が知りたくなるのです。

例えば9.11事件があったり、イラク戦争があったりすると、それについてチョムスキーは今なんと発言してるかとすごく気になって、すぐにZNetというインターネットのHPを開いて、彼の意見を読んでみるのです。すると「そうか、そんなふうに彼は今の情勢を捉えてるのか」などと、すごい発見があるわけです。

それで、「これは面白い」とか「これは是非みんなに知ってほしい」と思った論文やインタビュー記事を翻訳してHPに載せたりしてきました。また記号研の会員に英語学習を兼ねて下訳をしてみないかと呼びかけて、それを添削してHPで紹介する作業も続けてきました。それが積み重ねられて出来たのが『チョムスキー21世紀の帝国アメリカを語る』(明石書店, 2004)という本でした。

だから、あの本は元々、出版するために翻訳したものではないのです。面白いと思ったチョムスキーの論文・講演・インタビューを翻訳してHPに載せてきた作業の副産物なのです。チョムスキーの意見を読んでみて、自分だけが「そうだったのか、これは面白い」と思ってるだけではもったいないからというので、自分のHPに載せておいたら、結構な量が溜まってきました。

すると私が主催している英語教育の研究会(記号研)の会員のひとりが、ある日、「先生、これを単に蓄積しているだけではもったいないから、本にしたらどうでしょうか」と言うのです。そして、あちこちの出版社に電話をして交渉してくれました。そして「そちらで著作権を取れば出版してもよい」という返事をもらったので、更に彼はチョムスキーの代理人とメールで交渉しました。その結果、著作権が取れたということで、結局こんな本になってしまったのです。

先ほども言ったように、私はいつも記号研の会員には機会がある毎に、「誰か、これ下訳してみない?」と言ってきました。というのは、英語教師は授業以外にあまり英語を使っていないからなるべく使う機会を与えようと考え、メールやHPの掲示板で「今度のチョムスキー論文の下訳希望者はいませんか」と立候補者を募るんです。するとメールで「私やりたい、僕やります」と返事が届くので、

翻訳箇所の分担を割り振って、下訳が送られてきたら、間違いを直した上でHPに載せるということをやってきたのです。

だから、そんなふうにして教師自身が「日頃から英語を使っていると、こんなふう新しい世界が開かれてくるんだ」ということを生徒に示してやる必要があると思うのです。そのような体験なしに、生徒に英語の必要性を納得的いくように説明できないのではないのでしょうか。逆に、そのような体験を語ってやれば、実際に英語がどのように役立つかも分かるし、それを通じて、英語を学びたいという夢も育ててやることができます。またそれが教師の第二の仕事だと考えていることは既に述べたとおりですが、以下それについてもう少し説明したいと思います。

## 10 米国のどこを訪ねるのか

私は今までTESOLの学会なんかでアメリカへ十年間ぐらい通い続けました。一回行くと一ヶ月くらいレンタカーを借りて回ることもありました。アメリカというところは、そういう意味では旅行しやすいところで、レンタカーを借りて旅行しているかぎり、行き当たりばったりでもどこでも泊まれるという気楽さがあります。だけど、いわゆる観光地は原則として行かないことにしていました。

例えば、先住民(ネイティブ・アメリカン)の一つであるチェロキー族の保留地(リザーベーション)に行ってみるとか、ナホバ族が住んでいるところに寄ってみるとかです。あるいは先住民の視点も加味した映画として有名になったアカデミー受賞作品 *Dances with Wolves* のロケ地として知られているサウス・ダコタ州を訪ねてみるのも良いと思います。この州の南西部にはパイニンリッジ・インディアン保留地があり、先住民ダコタ族が大虐殺されたことで有名なウーデッド・ニー(Wounded Knee)があります。

これは、この大虐殺で先住民の抵抗は最終的に終わりを告げたとされているほど有名な土地です。1890年12月29日にスー族の一部族(ダコタ族)が、この地で第7騎兵隊に包囲され女子どもを含む約300人の先住民が殺されました。アメリカ大陸に入り込んだ白人たちが抵抗する先住民の土地を武力で奪いながら、西に領地を拡大していく動きが最終段階に至ったことを示す事件でした。

私がそこを訪れるきっかけになったのはサンフランシスコの有名な本屋で偶然にもウーデッド・ニーに関する小冊子を見つけたからです。その本には虐殺当時の生々しい写真も載せられていて、どうしても自分の目で現地を訪ねて見たくなったのです。そこですぐに飛行機でラピッド・シティまで飛び、そこからレンタカーで目的地を目指しました。手がかりになるのは上記の本に掲載されていた粗末な地図だけでした。

しかし、このような体験を学生に語ってやることで、つたない英語を私がどのように使いながら旅をしているのかが分かってもらえると思うのです。それは同時に、学生の知らなかったアメリカ史あるいはアメリカ像を伝えることにもなっていると考えています。ハリウッドなどの観光地を訪ねているだけでは決して知ることのできないアメリカを、そのような旅は与えてくれるからです。

そのような意味では、先住民の土地ではなく黒人の地を訪ねるという方法もあります。というのは、英語教師であれば誰でもキング牧師の有名な演説「I Have a Dream」を教材として使ったことがあると思うからです。公民権運動の出発点だとされるバスボイコット運動がおこなわれたのは、アラバマ州モントゴメリーですが、実際にモントゴメリーを歩いてみると当時の黒人の苦労がよく分かります。

私は夏休みの8月に実際に歩いてみましたが大変な暑さでした。炎天下を歩いてみて初めて、バスボイコットでずっと歩き続けた黒人たちのつらさと自由への強い思いを実感できた気がしました。あのバスボイコット運動は381日間、すなわち365日と16日間も続いたんです。夏も秋も冬も春も。だからそれをずっと実際に歩いてみると本当に実感が湧きます。そういうことを実際に体験してみて生徒に語ってやると、同じ教材を扱っていても迫力が全く違ってきます。

ちなみに、この公民権運動に励まされて、1960年代後半以降、新しい先住民の運動が起きます。その運動は公民権運動の「ブラック・パワー」に対して「レッド・パワー」と呼ばれました。この「アメリカ・インディアン運動」(American Indian Movement)の高揚とともに、ウンデッド・ニーは「レッド・パワー」の聖地となりました。というのは、1973年2月27日にAIMは同地を占拠してスー族国家の独立宣言を行い、世間の注目を集めたからです。

この日、AIMの活動家および居留地住民約500人が、ウンデッド・ニーのローマ・カトリック教会と交易所を占拠し、神父を含めた11人の人質を盾に、それまでに合衆国政府がインディアンと結んだ371の条約の調査を迫ったのでした(実際に結ばれた条約数は700前後という説もあります)。さらに国土の20分の1の返還、インディアン行政局の廃止なども要求しています。

この71日間に及ぶ占拠は、5月8日に1200人も逮捕で集結を迎えます。しかし、この事件は、アメリカ建国の陰に隠された先住民に対する迫害の歴史を白日のもとに晒したのでした。すなわち先住民と結んだ条約のほとんどが白人側によって一方的に破られてきた事実、言い換えれば合衆国という土地は彼ら先住民から奪ったものにほかならないということを、アメリカ全土に知らせることになったのです<註4>。

## 11 「十年の法則」とは何か

以上に述べたようなことを、まず体で示してやるのが英語教師には必要ですし、それが英語教師の非常に大きな仕事だと私は思うのです。さもないと、何度も述べているように、英語を学ぶ意味を生徒に教えられないのではないのでしょうか。そのような英語を学ぶ意味や夢を語ってやって初めて、英語を何年も学び続ける意欲を生徒は維持できるのではないのでしょうか。なぜなら、どんな言葉でも一朝一夕では習得できないからです。

私は今年で(2004)もう六十歳です。昨年7月12日に60歳になったんですが、60歳にしてやっと英語が少し分かるようになったかなという実感なんですね。学生にはよく「英語が出来ないから英語の教師をしてるんだ。英語が出来るようになったら英語教師を辞めたい。英語ができるようになれば、もっと良い給料をもらえる職業はいっぱいあるから、そのときになったら英語教師をやめるんだ」と冗談を言っているのですが、未だに辞められないという状況です。

私は、大学を出ているのですから頭もそれほど悪くないとおもっていますし、もう何十年も英語教師をやっているわけだから、もっと英語ができて良いはずと思うのです。それでも「英語が分かった」「英語が使えるようになった、もう勉強する必要がない」という実感がないのです。だとすれば、生徒に必要なのは、詰め込んでもすぐ忘れるような知識を与えるのではなく、最低十年以上も英語を勉強し続ける夢や意欲を与えることではないのでしょうか。

今井むつみ・野島久雄『人が学ぶということー認知学習論からの視点』(北樹出版, 2003)に「十年の法則」というものが載っています。どんな道・どんな仕事も十年ずっとやり続けて初めて本物になるというのです。だとしたら、何かを十年やり続ける力、夢を十年抱き続けて捨てない力を生徒に与える・育てることが教師の仕事だということになります。十年間、夢を持ち続けるということそのものが一つの学力なんです。

何度も言いますが、英語を使ってこういう未来を切り開きたいとか、英語を使うことによって新しい知見を得た喜び・感動、英語を通じて自分が人間的に大きくなっていく実感とか、そのような夢や体験というものを常に語ってやり体で示してやるのが教師には必要で、それが意味で教師の仕事の全てだと思うんです。そういう夢や動機づけなしにいくら知識を詰め込んでもザルに水を入れるようなものです。

たぶん皆さんも経験や実感があると思いますが、私は大学時代にロシア語もやりましたしドイツ語もやりましたしフランス語もやりました。しかし現在それらは、ほとんど何ひとつ残っていません。



それはやはり「ずっとこれを使わなきゃいけない」とか、「これを使って何かしてみたい」という夢がなかったからだと思うのです。十年も持ち続ける夢がなかったからではないでしょう。

他方、そのような夢を生徒・子供たちに与え・育てることができれば、彼らはぐっと伸びてきます。生徒・子供たちの夢に一旦火がつけば、彼らは驚くほど違ってきます。私の連れ合いは岐阜大学のすぐ近くの私立大学に勤めているんですが、周辺の進学校教師から見れば、お世辞にも良い学校とは見られていない大学です。ですから英語の学力も極めて低いですし、学習意欲もあまり見られません。

しかし（こんなことを言うと誉めすぎかもしれませんが）連れ合いの授業でロックやフォークやいろんな教材を使いながら手作りのプリントで授業をやっているうちにだんだん火が付いてきて、TOEICで770点を取る学生が出てきました。英語が面白くなってきて、彼女のクラスからはニューヨークへ行きたいとかイギリスに行きたいとかオーストラリアに行きたいとかいう学生が生まれてきているのです。それで勝手に自分で道を開拓して海外に出かけています。

たとえば、オーストラリアに行った学生は小学校日本語クラスの助手をしながら、結局はシドニー工科大学の日本語教育コース（大学院の1年間コース）に入って日本語指導の資格を得ました。その学生は私の家にもよく遊びに来てたいからよく知っているんですが、初めの頃、彼の書く英語は全く支離滅裂で読むに耐えないようなものでした。その彼が、オーストラリアの大学を出て、しばらく小学校の英語教師をしたあと、驚いたことにフライト・アテンダントになってしまいました。

聞いてみると、もともと彼はフライト・アテンダント（昔で言うスチュワーデスですが、今では男の仕事にもなってきたフライト・アテンダントと名称も変わりました）になりたかったのだということです。しかし余りにも英語力が低いので諦めていたんだけど、大学に入って寺島クラスに出るようになってから再び夢と希望が湧いてきたということです。そして結局、彼はオーストラリア航空に入って今はフライト・アテンダントをしているというわけです。夢は学力を育てるのです。

今、岐阜の教育委員会はTOEICの試験を全員強制的に受けさせています。「中高の英語教師全員が、2003年度から2005年度までの3年間で、最低1回は受験する。合格目標点は730点」だそうです。ところが、いわゆる二流三流の高校や職業高校から入学してきた、ほとんど英語なんて大嫌いだって言っていた学生が770点取るように変わっていくわけです。それは授業を通じて「英語って面白い」と思わせたり、「英語を使ってこんな仕事してみたい」という夢を育ててきたからだと思うのです。

なぜなら先述の通り、連れ合いも私と一緒に様々なところを訪れ、様々なことを見たり聞いたりしていたので、学生たちは教材の面白さだけでなく教材の説明・解説を通じて、様々な刺激を受け大きな夢を育てられたからではないかと信じています。教師はそういう夢を育てるということがひとつの仕事で、それ抜きに細かな技術をいっぱい教えても、それはやはり本物の力ではないから残らないのではないかと思います。「十年の法則」に見るとおり、語学力というのはそんな簡単に付くものではないですから、単に東大に入るとか金沢大学に入るとかいう短期間しか持続できない受験のための夢ではなく、今まで述べてきたような持続して何かをやり続けることができる夢を生徒に与えること、それが私の言う「教師の二つ目の仕事」でした。

## 12 「転移する学力」を育てる

次に「教師の三つ目の仕事」、すなわち「英語の幹と枝葉を区別して、幹をきちっと教えてやる仕事」の話に移ります。これが教師にとって非常に大事な仕事と思うのですが、その前に冒頭で簡単にふれた「転移する学力」についてもう少し詳しく説明しておく必要があるように思います。

私は、「転移する学力」には二つの種類があると考えています。すなわち、(1)「見える学力」としての「転移する学力」と、(2)「見えない学力」としての「転移する学力」、の二つです。まず「見えない学力」としての「転移する学力」とは何かと言うと、「集中力」「持続力」「計画力」の三つです。



定時制高校に勤務していたころ私がいつも次のように生徒に言っていました。「別に英語でメシを食うわけでもないのだから、私の授業で英語力を身につけなくてもどうってことないよ。しかし、たとえ私の授業で英語力は大きく付かなかったとしても、見えない学力としての集中力・持続力・計画力、この三つが身に付くようになれば、君たち世の中でどんな職業に就いたってちゃんとメシが食って行けるようになる。」

大抵の高校生は集中力が15分しか持続しません。最近は大學生でも30分が限度です。しかし授業が面白くなってきて集中力が付いてくるようになると60分でも平気になるし、90分でも持続できるようになります。ですから、最初は集中力が15分くらいしか持続しない生徒にどうやって集中する力を付けてやるかということが、教師の仕事になるわけです。その次が持続力あるいは計画力ということになります。

だとすると、どうすればそのような「見えない学力」を生徒につけてやるかということが次に問題になってきます。先に「評価の基準を生徒にきちっと示す」ことの意味を説明しましたが、実を言うと、この「評価基準の公開」ということが集中力・持続力・計画力を付ける方法でもあるんです。「何月何日までにどんな課題をどこまでやったら何点」ということが公開されていれば、生徒は自分で計算しながら計画を立てていきます。

逆に「自分は英語に命を掛けるつもりはないのだから赤点さえ取らなければよい」ということになれば、「何月何日までにあの課題だけやればよい」というふうにメドを付けなければいけませんから、それも一つの計画力なわけです。「とにかく単位を取ればよいんだ、そのためにはあの課題をいつまでにやればよいんだ」というような発想であっても、そのようなかたちで集中力・持続力・計画力を育てることができれば、それはそれですごいことではないでしょうか。

なぜなら、そういう力さえ身に付いていれば、世の中に出ても大体まともな職業に就いていけると思うのです。あと必要なのは算数力すなわち計算力と、国語力すなわち「読み書き」能力ぐらいではないでしょうか。これさえあればどんな職業についても何とかやっていけます。しかし集中力・持続力・計画力がない生徒を雇っても（そして算数力すなわち計算力と、国語力すなわち「読み書き」能力がなければ）何も仕事をさせることができないでしょう。

最近では就職するとパソコンを使える能力が要求されます。しかし皆さんだって一から百まで全てを習ってからパソコンを使っているわけではないでしょう。情報教育でも機械は日進月歩ですから手取り足取りして生徒に全てを教えることは不可能です。私にしても、誰かに全てを教えてもらってからパソコンを使っているわけではなくて、マニュアルを読んで四苦八苦しながらパソコン使えるようになっていくわけです。ですから「見えない学力」を持ち、日本語さえ読めれば、後は何とかできるのです。

### 13 英語にとって「見える学力」の基礎とは？

以上では、「転移する基礎学力」を二つに分けて、そのうちの一つである「見えない学力」、すなわち集中力・持続力・計画力について述べてきました。それでは次に「見える学力」としての「転移する学力」とは一体何かということが問題になります。それを簡単に言うと、「英文法の幹とは何か」「英音法の幹とは何か」ということになります。英語教育をする際に「ここさえ押さえてやればよい」というものがあるとすればそれは何かということなのです。

この会場へ来る前に教育センター長の真鍋先生（物理化学）とも少しお話ししましたが、物理学だったら $F=ma$ という微分方程式が全てなんです。あらゆる力学はそこに帰着しちゃうわけですから、後はその微分方程式を解くことに帰着するんですね。昔の生物学というのは生物を分けること、すなわち分類学が基本でした。分類学というのは、似たものと違ったものを分けていくことであり、分類する際の基本的な発想は二分法です。

たとえば、世界をまず「有機物」と「無機物」、「生物」と「無生物」に分けます。そして今度は生

物を「植物」と「動物」に分けます。次に「植物」を「隠花植物」と「顕花植物」などに分けていく方法です。動物の場合には、まず「卵生」と「胎生」に分けることから出発します。要するに分類学の基本は二分法なのですが、このように分けることによって今まで見えなかったことが見えるようになっていくのです。まさに「分かる」は「分ける」なのです。

しかし、科学が高度化していくと単なる分類には満足できなくなります。たとえば、単に生物を「植物」と「動物」に分けるだけでは満足できなくなってきます。なぜなら分類していくうちに、モネラ、原生生物、菌類など、「植物」にも「動物」にも分類できないような生物が出てきます。そこで初めて生物の「水源地」としての「細胞」なるものが発見される土台が生まれてくるのです。

このように科学を研究していくと、あるひとつの原理に帰着するわけです。それを私は「水源地」と言っていますが、先ほども言ったように、力学の場合はそれが  $F = ma$  という方程式になるわけですし、物質の構造になると「分子」「原子」の構造に帰着することになります。だからそういうものさえ押さえれば、当面、枝葉の問題は無視して良いことになります。

だとすると、英語の場合、その「水源地」は何かということが次に問題になります。例えば、「これを押さえておけば他は枝葉なんだから間違ってもいいんだ」というものを英文法で見つける必要があるわけです。そしてそれを教室できちんと教師は教えなければいけないことになります。英音法についても同じで、「英語の音声はここさえ押さえておけば、全て英語っぽい発音になるんだ」というものを教師は知っていなければならないし、授業では、そこを焦点に教えなければならないことになります。

結論から先に言うと、私は英文法の水源地は「語順」だと考えています。教室の後ろの展示コーナーに『センマルセンで英語が好きになる本』(中経出版)という本を置いてありますが、あれは全国学校図書館協議会選定図書になったものです。この本は英文法の「水源地」、私たち研究会の用語で言うと「センマルセン」ということになりますが、そのような「語順」に焦点を当てて書いた本です。たぶん何か意味のある本だったから選定図書になったのだと思うので興味があれば、ぜひ参照していただければ幸いです。

また英音法だったら、「リズムの等時性」というものさえ学力としてきちん身に付けてやれば、あと細かなことは必要ないと考えています。これさえ身につければ英語っぽい発音になるわけです。細かな単音の区別、[l]と[r]の区別とか、[b]と[v]の区別とかはあまり必要ないのです。そういうことにエネルギーを掛けている限りは先へ進めないですね。そうではなくて「英音法の水源地」、すなわち「リズムの等時性」に従った発音がきちんとできるようになるまでは枝葉に手を出してはいけないのです。

では、なぜ[l]と[r]の区別は必要ないのでしょうか。それがいかに不必要かというひとつの例ですが、江戸っ子の下町ことばでは「ア、シコウキガ、トンデキタ」のように、「ヒコウキ」を「シコウキ」と言ったりします。また落語に出てくる長屋の大家さんも「おい、寒いからシバチを持ってこい」などと言っています。「ヒバチ」とは言わないのです。それでも十分に話は分かります。長屋の住人同士ではなく、外から来た人にも意味は通じます。だから、「ヒ」と「シ」の区別はある意味で要らないんです。

英語でも同じで、通じるレベルの英語を身につけて行けばよいのです。英語の「日本語弁」が話せるようになれば良いのではないのでしょうか。前の国連事務総長なんかも訛りがかなりひどかったと記憶しています。だけど、それでちゃんと国連の事務総長として十分に通用しているのです。私はカリフォルニア州立大学で1年間、日本語を教えたことがあるのですが、そのときに友だちになったスペイン人がいるんです。その彼もスペイン訛り丸出しの英語を話していました。それで大学教師として通用してるんです。

彼は自分の訛りを直す気は全くないように見えました。私から見ると、彼の発音は大学教授である

にもかかわらず全くひどい発音でした。しかし、それを直そうとしないのです。それどころかお国訛りの方が良いのだという感すらしました。彼の家で食事に招かれたとき、「ナイフとフォークを使って見事なリンゴ剥き披露してやったら米国人どもが驚嘆していた」と自慢していましたから、野卑なアメリカ人よりもスペイン帝国の後裔のほうが文化水準が高いのだという誇りを持っていたのかも知れません。

私が東京の大学に行ったとき能登弁でしか話せないのが恥ずかしくて、人前で話すのがあまり好きではありませんでした。だけど今は能登弁で何が悪いという気持ちです。だって大阪人は絶対に大阪弁を直そうとしません。だとすれば、英語でも「お国訛りで話しても何が悪い」ということになります。つまり英語は、聞いて分かればよいのであって、発音は相手に通じさえすれば自分の訛りでよいのです。問題は相手の言っていることが分かるかどうかなのです。

#### 14 通じる英語の「水源地」とは？

だとすると「通じる英語の水源地」は何かということが次の問題になります。英音法の枝葉ではなく幹の部分だけを押さえるとしたら、それは何かということです。それが先に何度も述べている「リズムの等時性」なんです。詳しくは拙著『英語にとって音声とは何か』（あすなろ社）を読んでいたのですが、英語は強音のリズムがほぼ等間隔で現れる基本的な性格を持っています。したがって「強」と「強」の間に「弱」がいくつあってもそれは関係ないんです。だからこそ、その「弱」の発音は変化するのです。

例えば、「ドント ユー」ではなくて、「ドンチュウ」になったりします。これを音声学的には「音の同化」と言います。あるいは、don'tの[t]が脱落したりします。むしろ脱落する方が自然な英語音なのです。これが國弘正雄『英語の話し方』（サイマル出版会、1984）の言う「音の化学変化」です。この「化学変化」が起きるのはなぜかというところリズムの等時性があるからで、残念ながら國弘さんは上記の書では、この点にきちんと言及していません。それが國弘さんの弱点だと私は考えています。

それはともかく、リズムの等時性にしたがって発音なり発話なりが出来れば、すごく英語っぽく聞こえるようになるのです。[l]と[r]を正確に区別して発音できるようになったとしても、一音一音、単語のひとつひとつを強く発音している限り絶対に英語らしい発音になりません。そして、そのような発音をしているかぎり永遠に聞こえるようにはならないのです。これは本日のセミナー「午後の部」で実践報告がありますが、そのときに時間があったら実演したいと思っています。

実は同じことがドイツ語でも言えるのです。チャップリンの映画に有名な『独裁者』という映画があるんですが、あの中でヒンケルという登場人物が出てきます。ヒトラーをモデルにした人物です。そのヒンケルが群衆に向かってドイツ語で演説する場面があるんです。だけど実際にヒンケル、つまりチャップリンが話しているのはドイツ語でも何でもありません。全く不明な言語です。ところが聞いている人にはドイツ語に聞こえるんです。それはドイツ語特有のリズムとイントネーションがあるからなんです。

だから、英語の場合も、英語特有のリズムとイントネーションさえ身につければ英語として相手に聞こえるんです。[l]と[r]の区別や[v]と[b]の区別ではないんです。したがって、そういう「水源地」をきちんと教えさえすれば英語音声の「幹」は押さえたことになるし、「転移する学力」になっていくんです。だとすると次の問題は、それが「転移する学力」になるまで生徒に肉体化させるにはどうすればよいかです。その方法として開発されたのが「リズム読み」という方法でした。

つまり、今までの発音では気持ちが悪い、「リズム読み」で読まないで気持ち悪いと思うようになったら、それは「転移する学力」になったということなのです。そこまで肉体化させるのが教師の仕事であり、教師の力量なわけです。体の中に英語の音声リズムを刷り込むわけです。ところが大抵の教師は、単音の発音訓練しか受けていないので、生徒に対しても単音の発音訓練で終わってしまってい

るのが普通です。これでは生徒の英語力が伸びていかないのは当然ではないでしょうか。

私はロシア語が大学在学時の第二外国語だったんですが、その当時は、ソ連がスプートニクを上げたりして、ロシア語が理系のクラスでは一世を風靡した時代でした。当時は数学でもスミルノフという有名な数学者が『高等数学教程』(共立出版)という本を出していて、その日本語訳を読んで非常に興奮した、とても面白かった記憶があります。そんなわけで私はロシア語を勉強したんですが、ロシア語の授業ではブースに入って必死になって単音を聞きわける訓練をさせられました。

そんなふうにして、ブースに入ってイヤホンを耳に付けながら聴解訓練や発音訓練をさせられたんですが、ほとんど何も身に付いていません。だから、そういう一音一音の聴解訓練や発音訓練で外国語は身に付かないと思うようになりました。それで新しく私が開発したのが「リズム読み」「合わせ読み」「表現読み」などという方法でした。その「寺島メソッド」で指導してみると、大学生でも音読をすごく楽しんでくれるのです。90分の時間もあつという間に過ぎて行くわけです。

学生はみんな熱中してやりますし、グループで発表会もやります。「先生、声を出さずってこんなに楽しいと思わなかった」とほとんどの学生は言っています。その実践をまとめたのが、拙著『キングで学ぶ英語のリズム』『チャップリン「独裁者」の英音法』など『英語音声への挑戦シリーズ』全6巻でした。ですから、そのような「転移する学力」をどうやって生徒につけるかが教師の力量なわけで、枝葉にこだわっている限りは永遠に生徒の英語力は伸びないというのが私のこれまでの体験なのです。

私自身が初めて高等学校の教師になったときに、当時の教科書は懐かしの『Jack & Betty』で、音声の付属教材はレコード盤しかありませんでした。私の英語音声力は実に貧弱だったものですから、少しでも聴解練習をしようと思って、その中学一年生のレコード盤を聞いたのですが、何を言っているのか全く分からないという状態でした。それくらいひどい英語力だったのですが、どういふわけか石川県の教育委員会は私を採用したのです。今にして思えば、こんな私をよくぞ採用したものだと思います。

けどそういう私でも今は英語の音声は聞けるようになっているのです。何が私を変えたかという点で定時制高校という教育環境でした。教科書では生徒が授業にのってこない、教科書が役に立たないので、やむを得ずロック音楽を教材にすることにしました。まず自分でも歌えるようにならないと指導できないので、さまざまな本を読み、様々な方法を試してみました。そうして到達したのが「リズム読み」という方法だったのです。この方法で歌詞がすらすら読めるようになると、英語の歌が本当に容易に歌えるようになるんです。

いま私は岐阜市の中日文化センターで英語カラオケ教室を開いています。これは「シティ・カレッジ」といって岐阜大学「出前授業」の一つです。英語の歌を「リズム読み」するだけで、きれいに英語の歌が歌えるようになる、簡単に歌えるということを成人に体験してもらっています。実を言うと、私が定時制高校にいるとき、ビートルズのYesterdayが歌えるようになるのに一ヶ月の猛特訓・自己訓練が必要でした。しかし私が一ヶ月かかって歌えるようになった曲を、生徒は1週間で歌えるようになるのです<註5>。

ある意味では実にはがっかりするような体験ですが、「リズム読み」でやると本当にすぐに歌えるようになるのです。「リズム読み」がきちんとできるようになったら後はメロディに載せていだけなんです。逆に言えば、英語のリズムで読めるように指導することが、初めは最も困難なのです。それさえ出来るようになれば、メロディに乗せるのは実に簡単なのです。そして不思議なことに、「リズム読み」ができるようになると、今まで聞こえなかった音が聞こえるようになるのです。これは実際に体験していただかないと納得してもらえないかも知れません。

それはともかく、そろそろ時間が来ましたので、以上で前半の講演「英語教師の、三つの仕事」を終わります。後半では「英語教師の、三つの危険」をお話ししたいと思います。ご静聴ありがとうございます



ざいました。(拍手)

## NOTES

- 1) 今は機関紙の発行を止めて「メルマガ」に移行している。そのURLは下記のとおりである。参照いただければ幸いである。<http://happytown.orahoo.com/kigouken2/>
- 2) 言語権については、言語権研究会編(1999:214)などを参照。1996年には民間の世界言語権会議で「世界言語権宣言」が採択されている。同宣言の日本語訳は、言語権研究会編(1999:161-182)のほか、インターネット上ではCCC研究所(Institute for Cross-Cultural Communication)訳のものが、東京大学言語動態学研究室のサイト <<http://www.tooyoo.l.u-tokyo.ac.jp/ichel/udlr/udlr-j.html>> に掲載されている。ここでは、その「前文」のみを資料として載せた。
- 3) 図表2「可児市外国人児童の就学状況」は2003年3月8日(土)におこなわれた岐阜大学留学センター・フォーラム「地域における日本語教育：岐阜地域の多文化共生を考える」の報告書から引用した。 <<http://www.gifu-u.ac.jp/~isc/jp/center/forum2003.pdf>> ここには当日の講演だけでなく貴重な資料も掲載されている。
- 4) 上記の事実については、阿部珠理(立教大学)の西日本新聞1993年8月5日づけ掲載記事および次のサイト「米国民衆史年表3」 <<http://www10.plala.or.jp/shosuzuki/chronology/usa/usa3.htm>> を参考にした。このサイトは民間の医師・鈴木頌(しょう)氏が個人で作上げたものだが、大学の研究者でもこのような年表を作っている人を寡聞にして知らない。氏には他にラテンアメリカ史の詳しい研究があって、むしろ米国史よりもこちらが本職といえる。
- 5) 今は岐阜大学の「出前講座」を終えたあとも、中日文化センターからの依頼で、センター独自の企画として「英語カラオケ講座」を継続している。

## REFERENCES

- 今井むつみ・野島久雄, 2003『人が学ぶということー認知学習論からの視点』北樹出版
- 大津由紀雄・鳥飼玖美子, 2002『小学校でなぜ英語?ー学校英語教育を考える』岩波ブックレット
- 國弘正雄, 1984『英語の話し方』サイマル出版会
- 言語権研究会編, 1999『ことばへの権利：言語権とはなにか』三元社
- 齊藤貴男, 2004『機会不平等』文春文庫
- 鈴木孝夫, 1999『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書
- 寺島隆吉, 1990『英語音声への挑戦シリーズ』全6巻, あすなろ社/三友社出版
- 寺島隆吉, 1990『キングで学ぶ英語のリズム』あすなろ社/三友社出版など
- 寺島隆吉, 1990『チャップリン「独裁者」の英音法』あすなろ社/三友社出版
- 寺島隆吉, 2000『国際理解の歩き方』あすなろ社/三友社出版
- 寺島隆吉, 2000『英語にとって音声とは何か』あすなろ社/三友社出版
- 寺島隆吉・寺島美紀子, 2000『魔法の英語』あすなろ社/三友社出版
- 寺島隆吉・寺島美紀子, 2004『センマルセンで英語が好きに変わる本』(中経出版)
- 船橋洋一, 2000『あえて英語公用語論』文春新書
- 宮崎 駿, 堀 泰雄&キム・カバナ(訳) 1986『風の谷のナウシカ』三友社出版
- スミルノフ, 福原満洲雄(訳) 1958『スミルノフ高等数学教程』共立出版
- チョムスキー, 寺島隆吉(訳) 2004『チョムスキー21世紀の帝国アメリカを語る』明石書店
- デイヴィッド・グラッドル, 山岸勝栄(訳)1999『英語の未来』 研究社出版
- 映画『独裁者』
- 映画『神秘的な英語の国』(映画『もし、あなたなら〜6つの視線』の中の一つ)
- 映画『Dances with Wolves』



## APPENDIX

## 1) 世界「言語権」宣言 Universal Declaration of Linguistic Rights の「前文」(訳・CCC研究所)

出典：東京大学言語動態学研究室 <<http://www.tooyoo.l.u-tokyo.ac.jp/ichel/udlr/udlr-j.html>>

各々の言語が置かれている状況は、上記のように、非常に広範囲に渡る要因の影響、相互作用の結果による。つまり、政治及び法的；イデオロギー的及び歴史的；人口動態的及び領土的；経済的及び社会的；文化的；言語的及び社会言語的；言語間的；及び主観的要因による。

具体的には、現在の状況は以下の点によって規定されている。

a. 多様性を減少させ、文化の多元性、言語の多元主義に対立する態度を促すような、ほとんどの国に於ける長年に渡る単一化への傾向。

b. 各々の言語共同体の内的な結合を保証している相互関係の拡がり、ならびに相互作用の形態を混乱させてしまうような、経済、及びそれに起因する、情報、通信、文化の市場の世界化の過程。

c. 自由化を進歩と、また競争に凌ぎを削る個人主義を自由と看做すことを装い、それによって経済的、社会的、文化的、言語的な、深刻で増大する不公平を産み出している多国籍経済集団によって推進されている経済の成長モデル。

政治的自治の欠如によって、部分的あるいは全体的に散在することによる人口減少によって、不安定な経済によって、規範化されていない言語によって、あるいは支配的モデルと対立する文化モデルによって、現在多くの言語共同体が危機に晒されているが、以下の基本的目標が考慮に入れられなければ、これら多くの言語は存続することも発展することも不可能であろう。

a. 政治的観点からは、このような言語共同体がこの新しい成長モデルに効果的に参加することを可能にするような、言語的多様性の組織化を想定すること。

b. 文化的観点からは、世界的な情報伝達空間を、全ての民族、全ての言語共同体、全ての個人の、発展の過程への公平な参加に、十分に適合するようにすること。

c. 経済的観点からは、全ての人々の参加の上に、また社会間の生態学的な調和の尊重、及び全ての言語と文化の公平な関係の尊重の上に、持続的な発展を基礎づけること、

これら全ての理由により、この宣言は、国家ではなく個々の言語共同体を議論の出発点とし、全ての人間にとって公平で持続的な発展を保証ならしめるような国際的諸制度を強化するという枠組みの中で起草されており、そして共存、及び相互尊重と相互利益の基礎の上に、言語的多様性のための政治的な枠組みの組織化を擁護することを目的としている。

## 2) 英語熱とキログ・アパ

出典：毎日新聞(福島版)「ちょん・ひょんしるの韓国便り」(2005/3) 毎月第3火曜日連載

今年の1月、韓国の小中高校の教員25名が福島にやってきた。私の市民講座を訪ねた時、彼らが生徒にいきなり「韓国のキログ・アパを知っていますか」と聞いた。韓国における英語ブームの過熱ぶりを指摘したかったようだ。

妻子を英語圏に留学させ、一人暮らしをするキログ・アパが韓国の社会問題となって久しい。キログは(かも)、アパはパパ。キログは、韓国人なら誰もが親しみを感じる鳥だ。結婚式で新郎が木彫りのキログ一対を新婦に渡す儀式がある。キログは一度つがいになると、一生相手を変えない習性があるといわれ、子どもに対する愛情も深いという。野山が火事になった時、子どもと一緒に焼け死ぬことはあっても、子どもを残して逃げることはないそうだ。また、雌が先に死んでも雄が子どもを育てることから、昔から家族愛や父性愛の象徴とされている。

20年ほど前、日本で暮らし始めた頃、家族と離れて単身赴任する父親がいることを知って驚いた。当時の韓国では考えられなかったからだ。子どもの学校があるから家族で移れないという説明を聞いても、悲しいことだと思うばかりだった。

でも、5年ぐら経つと、今度は韓国で幼い子どもと妻を外国に送り出して、一人で暮らすパパが急増した。ほとんどは英語力を身に付けさせることが目的だ。妻子を米国や豪州、イギリス、ニュージーランドなどの英語圏に留学させ、パパ一人が韓国で働いて学費と生活費を仕送りする。英語圏にいれば自然に英語ができるよ

うになると考えているのだろう。でも、幼い子どもを一人で留学させられないから、母親がついていく。家族が離ればなれになって暮らしても、子どものためにしかたないという考えだ。

数年前、韓国の粉ミルクのCMに「お父さんよりも賢い子に育てます」というのがあった。子どもに自分より良い人生を送らせたいと、世の親は考える。そのためには英語ができなくてはならないと考えるのだ。

「教育移民」も増えている。「世界化」を推し進める政府も後押ししている。確かに、インターネットを中心に英語の重要さが増してはいる。でも、果たして英語を学ぶことだけで「世界化」が達成されるのだろうか。昨年、韓国南部の田舎に行ってびっくりした。明らかに韓国人ではない顔の女性が農協の売り場で働いていたのだ。バンコクから嫁いで来たという。他にブラジルやタイ、中国からも来ているという。私の親戚にもフィリピンから嫁いできたお嫁さんがいる。その時、福島にもいろいろな国から嫁いできた人がいると言ったら、村の人が驚いていた。

日本も韓国も国際化（世界化）には英語が必要だと考える風潮がある。韓国に暮らす外国人は、中国、フィリピン、ベトナム、ミャンマー、バングラデシュ、パキスタン、スリランカなどアジア系の人々が圧倒的に多いのに、みな英語にあこがれる。

私の子どもが成人した時も、今のように英語を中心に世界が回っているだろうか。英語にこだわらずに外国語の理解を深めることで、英語が苦手な子どもは救われるかも知れない。私は英語がとても苦手だった。だが、日本語に出会って英語に対する劣等意識から解放された。日本語は学びやすく楽しかった。英語イコール外国語という固定観念から離れることで、新しい世界が開けてきたのだ。

最近、家族から離れて暮らすことを苦にするキログ・アパが増えている。その辛い生活がもとで離婚に至るケースも話題になっている。1日も早く英語という呪縛から抜け出したいものだ。（ちよん・ひょんしる）